

ヤマウドの増殖

ヤマウドの増殖方法には、実生、株分け、さし芽などがありますが、大量に増やすには実生の方法がとられています。この場合、コンテナやポットなどの容器に山砂（赤土）など腐植に乏しい土壌を用いた栽培事例が発表されています。

しかし、容器での栽培は、施設が充実していないと、まき付け床が乾いたり、また過度の散水で稚苗の立枯れが発生することがあり、散水管理に

労を多く必要とします。また、稚苗のうちに畑土への移植が必要であり手間も多くかかります。

こうした弊害を少なくするため露地での育苗方法を試みました。

1. 試験の方法

- 1) まき付け床まき付け時期の違いによる育苗
ア. まき付け床は当所構内ほ場に 10 cm の上げ床を

つくり、この上にB層土壌（赤土）を5 cmほど盛って整地しました。また、口径9 cmの育苗ポットに赤土と水ごけを用いたポット栽培を行い、この両者の生育状況を比較しました。（図-1）

イ. 供試用の種子

使用した種子は、当所ほ場で栽培しているウドの親株に結実したもので、9月に採取し、水洗して果肉や夾雑物を取り除き、十分に精選したのち、湿ったオガクズで包み、低温種子庫で越冬させたものです。

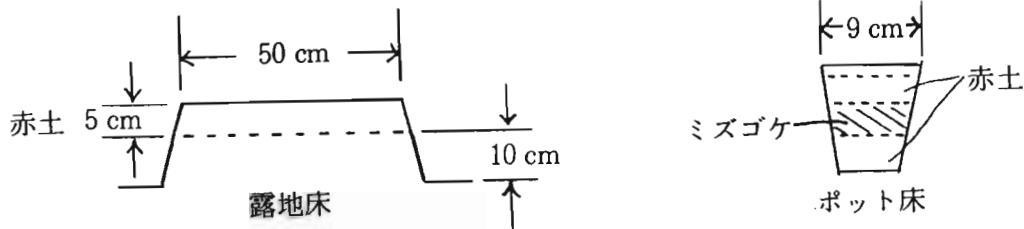


図-1 露地床とポット床

ウ. 種子のまき付け

露地床には4月中旬に m^2 あたり5 gの種子をまき、寒冷紗で覆いました。

ポットには4月上旬に10粒ずつをまき付け地温の確保と散水管理を行いました。

2) 庄替の違いによる育苗

露地床で育苗する過程で間引きをします。間引き苗は床替床に移植し、据え置き苗との生育比較をしました。

床替床は、 m^2 あたり堆肥1 kg、鶏糞200 g、化成肥料65 gを施して耕運整地し、25 cm×25 cmの間隔に苗を植え付け、根づくまでダイオネットで被覆しました。

2. 試験の結果

1) まき付け床とまき付け時期の違いによる育苗

露地床では、まき付け後10日間位で一斉に発芽しましたが、ポット床は温度管理をしたにもかかわらず発芽に約20日間を要し、両者ともほぼ同じ時期の発芽となりました。また両者の生育差は6月上旬ごろから現われ、同下旬には茎長で露地床10：ポット床2となり大差ができました。（写真-1、2）

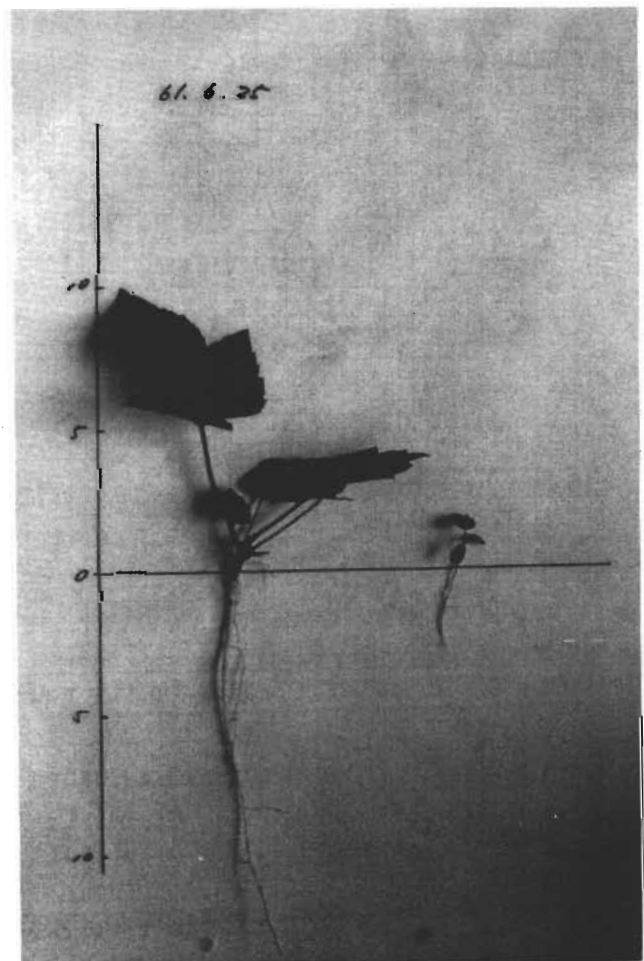


写真-1 ヤマウドの生育
（左、露地床苗、右、ポット床苗）

露地床では、まき付け時期が早く寒冷紗で覆った箇所の生長は最初良好でしたが、8月中旬以降は生長差は認められませんでした。

なお、ポット苗の生長は悪いため床替えをせずに放置しました。

2) 床替えによる生育状況

露地床苗は均一に発芽し、良好に生長したので、5月下旬に間引きをして、これを床替床に移植しました。

10月下旬、根株の掘り取り調査を行ったところ、床替苗の根株は据え置き苗に比べ細根が多く、また根張りも良好でした。しかし、茎長、茎重量、根長、根株重量は据え置き苗の方が若干優れていました。

また、据え置き苗は全体にバラツキが多く、ゴ

ボウ根が土中に深く入り込んでいて、掘り取りが困難でした。(図-2、写真-3)

3. 考察

1) 露地栽培では、畑にB層土壌(赤土)を施すことにより、肥沃をきらうヤマウドの発芽条件を満たすことができる。

2) また、発芽後に根茎が伸びて畑土の養分を吸収するので生長がよく、ポット苗のように稚苗のうちの床替の必要がない。

3) 地温が10℃以上に上昇しないと種子は発芽しないので4月中旬頃にまき付けをするのがよいと思う。(図-3)

4) 露地床では霜害や乾燥を防ぐために寒冷紗の効果の大きいことがわかった。

5) 十分に精選した種子の1gあたりの粒量は、

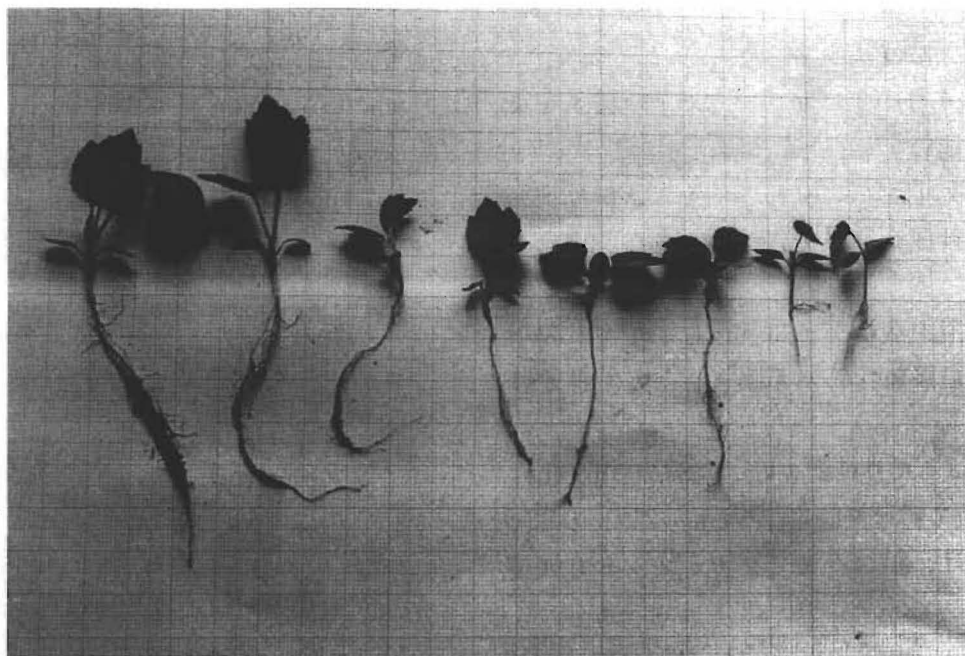


写真-2 まき付け時期及び管理による生育状況

(S. 61.6.25 撮影)

左から①4月10日まき付け、露地栽培、寒冷紗使用

② 同上

③4月15日まき付け、露地栽培、寒冷紗使用

④ 同上

⑤4月15日まき付け、露地栽培、裸地

⑥ 同上

⑦4月5日まき付け、ポット栽培

⑧ 同上

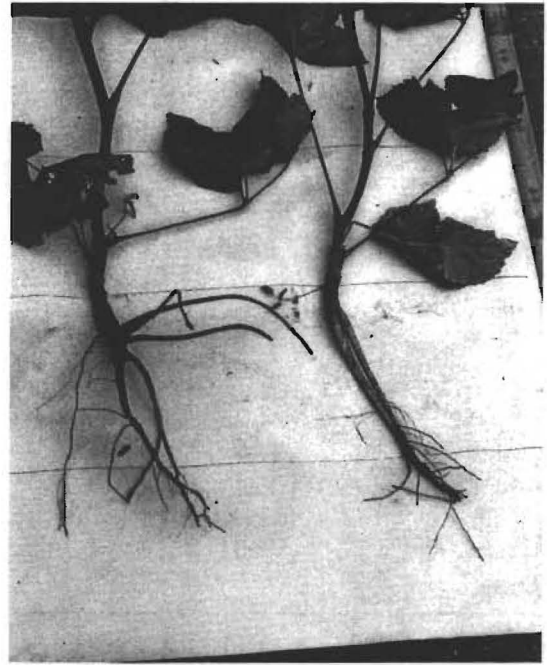
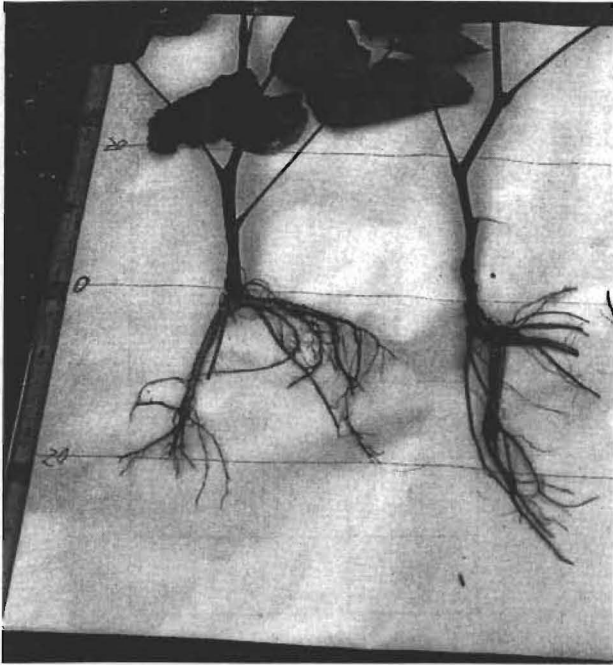


写真-3 床替苗と据置き苗の根株の形状
(左、床替苗 右、据置き苗)

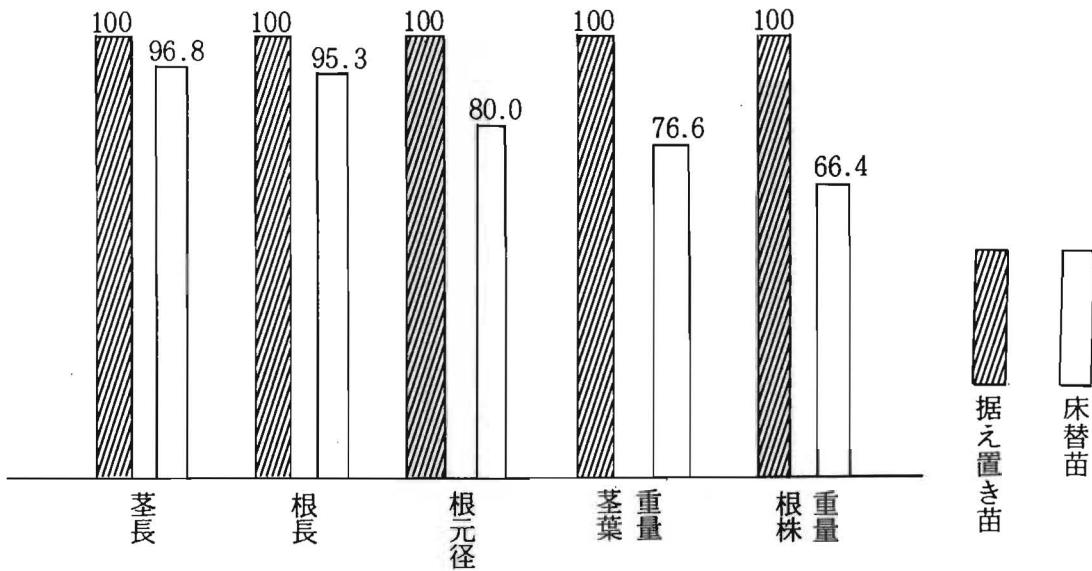


図-2 床替苗と据え置き苗の形状比較
(各5本、単位%)

およそ1,000粒であり、設計まき付け量 μ あたり5gは多かったように思う。ムラのないまき付けをすれば μ あたり2g前後でよいと思う。(表-1、写真-4)

6) 多少根株の形状にバラツキがあっても、できるだけ育苗の手間をはぶくために、まきつけ量を

少なくし、間引きもせず、床替えも1回だけという育苗方法も考えられる。

7) ウドは、自生地により青茎系と赤茎系がありますが、同一場所で栽培すると種子は交配します。

比較的軟かい性質をもつ青茎系の種子の採取は自生地で行うことが大切です。

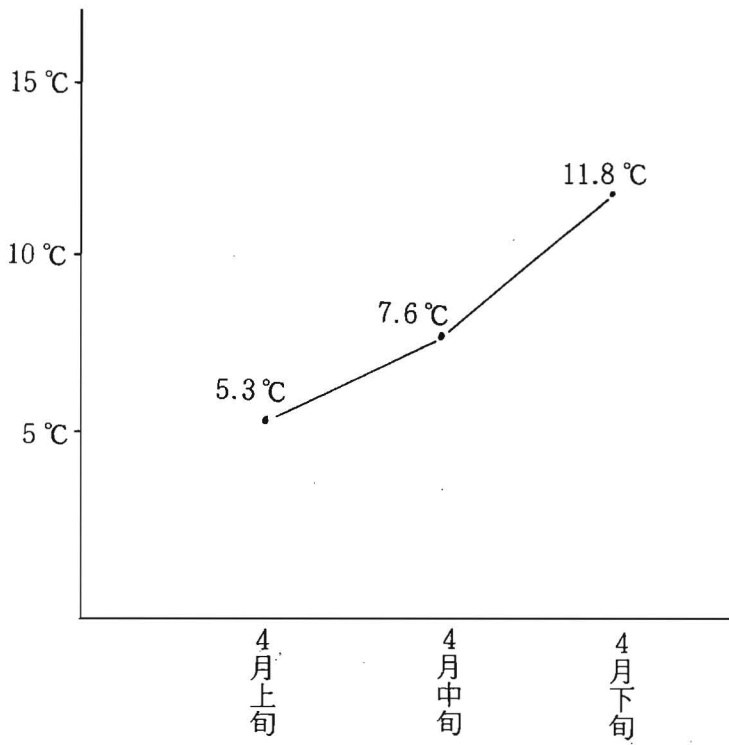


表-1 種子 1gの粒数 (風乾時)

I	1,177 粒
II	1,067
III	1,157
平均	1,134

図-3 地温の変化 (指導所構内土中 10 cm)

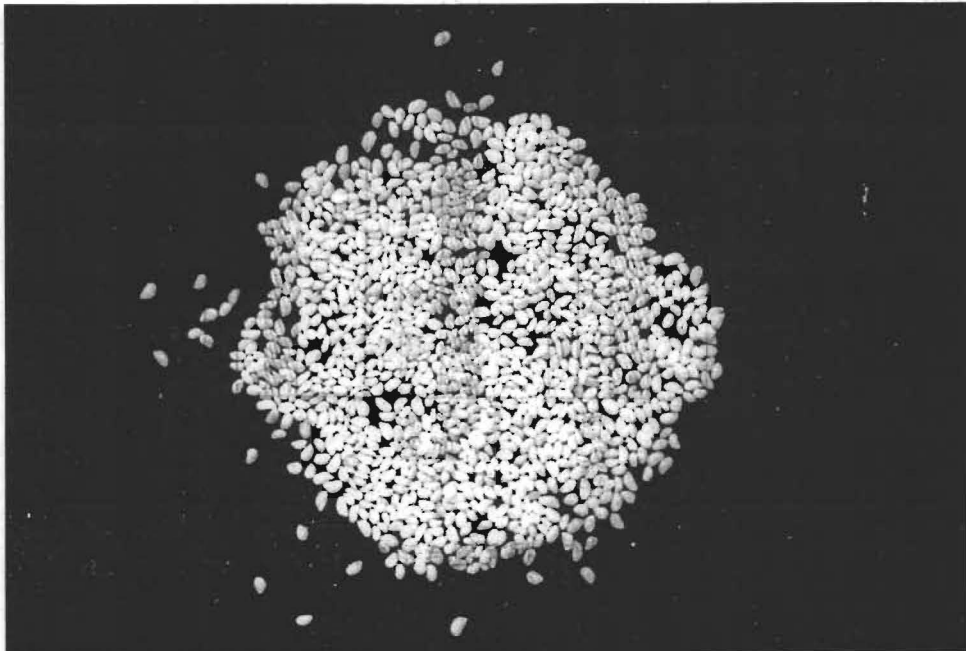


写真-4 種子 1gの状況

(経営部 一ノ瀬)